資料３

ゼミナール教育・卒業論文等から考える『出口の質保証』

2022年10月28日

京都橘大学　経営学部　経営学科
教育開発・学習支援室
西野毅朗
nishino-ta@tachibana-u.ac.jp

目次

1．はじめに
（1）報告者プロフィール
（2）本報告の根拠資料（調査データ）について

2．ゼミナール教育の観点から
（1）日本のゼミナール教育
（2）専門ゼミの目標と成長実感の関係
（3）専門ゼミの評価方法

3．卒業研究・論文の観点から
（1）卒業研究・論文の目的意識に関する問題
（2）卒業研究・論文の質に関する問題
（3）卒業研究・論文の評価規準に関する問題

4．まとめ
（1）現状の問題点の整理
（2）専門ゼミや卒業論文等を『出口の質保証』に活用する上での課題

１．はじめに

1-(1) 報告者プロフィール

西野 毅朗（にしの たけろう）

京都橘大学経営学部経営学科（教育開発・学習支援室）専任講師。同志社大学政策学部卒。同志社大学大学院社会学研究科教育文化学専攻博士後期課程修了。博士（教育文化学）。

高等教育を専門とし、とりわけ学士課程教育（初年次教育やゼミナール教育、卒業研究など）やFD（教授法や実践的な教育開発法）を主な研究対象としている。単著書に『日本のゼミナール教育』（2022年、玉川大学出版部）がある（目次は下記表のとおり）。

序章 なぜゼミナール教育に注目するのか	
第1部　ゼミナール教育の発展過程 —歴史的アプローチ	第1章 戦前期のゼミナール教育
	第2章 戦後期のゼミナール教育
第2部　ゼミナール教育の現状と課題 —量的アプローチ	第3章 教員視点で捉えるゼミナール教育
	第4章 学生視点で捉えるゼミナール教育
第3部　ゼミナール教育のエスノグラフィー —質的アプローチ	第5章 エスノグラフィーの方法論と対象
	第6章 専門ゼミナールへの導入過程—2 年次演習
	第7章 困難な課題への挑戦—3 年次演習①
	第8章 関係性の変化と影響—3 年次演習②
	第9章 就職活動と卒業研究と社会人生活—4 年次演習
補章 遠隔ゼミナール教育の姿	
終章 ゼミナール教育の過去・現在・未来	

1-(2) 本報告の根拠資料(調査データ)について

①教員調査

●ゼミナール教育や卒業研究・論文の教育実態を明らかにするため

●全国の人文・社会科学領域等の学科教育責任者を対象とした郵送調査

●2019年7-8月に実施

●有効回答数694 件

②学生調査

●ゼミナール教育や卒業研究・論文を通じた学習実態を明らかにするため

●全国の人文・社会科学領域等の学部4年次生を対象としたインターネット調査

●2020年3月に実施

●有効回答数1030件

※分野別及び地域別に回答者属性割合を確認し、令和2年度学校基本調査に基づいて算出された割合との差が5％未満であることを確認した。

●調査協力：マクロミル社

２．ゼミナール教育の観点から

2-(1) 日本のゼミナール教育

●ドイツを起源とし、日本では高等教育の草創期から**人文・社会科学領域**で導入されてきた教育方法。

●日本では「学生－教員間および学生－学生間の緊密な対話によって知識・技能・態度を総合的に育成することを目指す少人数教育」と定義され、**演習科目の１つ**として位置づけられる。また、種別、対象学年、目的によって4種類のゼミに分類される（表参照）

●最も一般的な「**専門ゼミ**」は、98％の学科が導入し、うち84%が必修。
※ただし、アンケートの特性上、実際の導入率はもこれより若干少ないことが想定される。

●**学習側面**と**共同体側面（人間関係づくり）**が共存する「学習・共同体」である。

●4年次には、卒業研究等を行い、その成果を卒業論文等にまとめることが多い。

分類	教養ゼミナール		プロゼミナール	専門ゼミナール（専門ゼミ）
種別	教養教育(共通教育)課程		専門教育課程	
対象学年	低学年次			高学年次
個別目的	教養教育	初年次教育 (初年次ゼミナール)	専門基礎教育	専門教育
共通目的	知識・技能・態度の育成			
教育方法	少人数教育／学生の発表および討論を中心とする			
環境	教員と学生、学生同士の人格的交流			
科目名称	多様			

出口の質保証で重要

【参考】ゼミナール教育が有効と考えられている教育目標

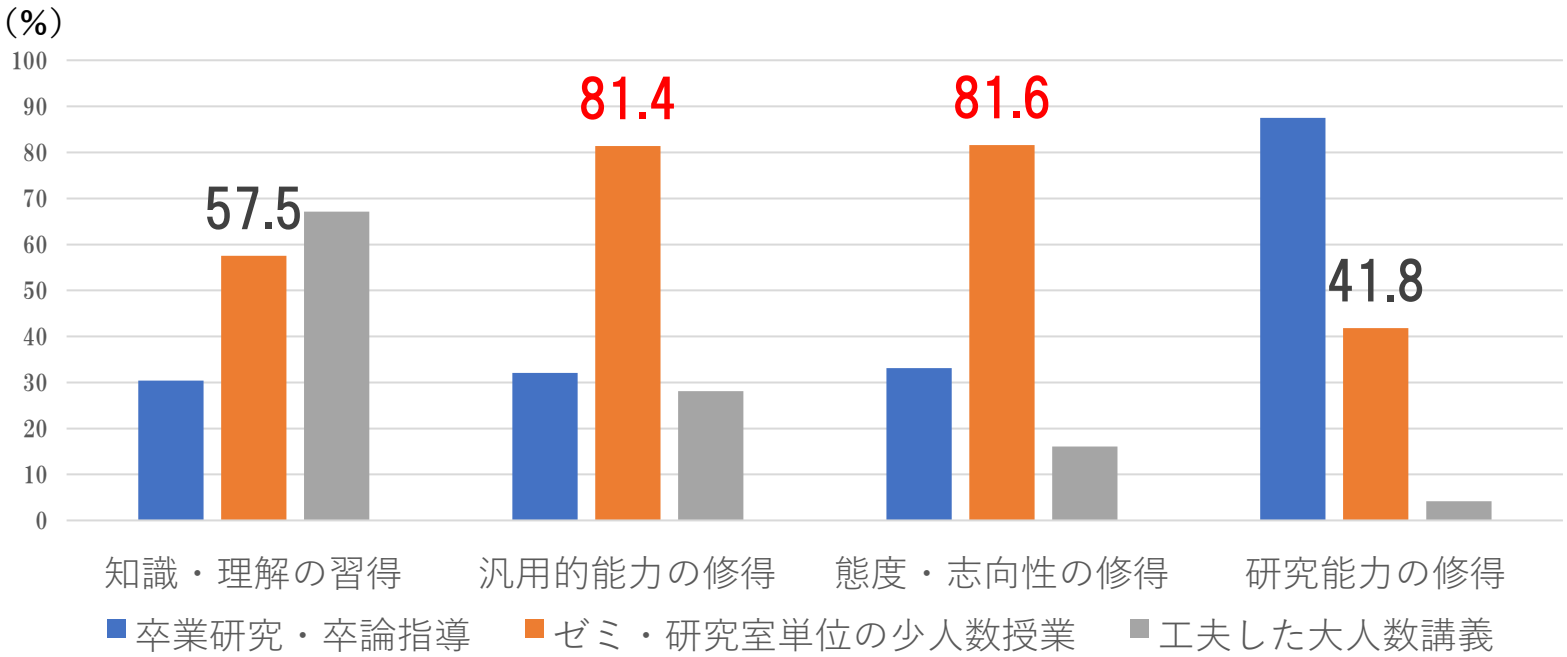
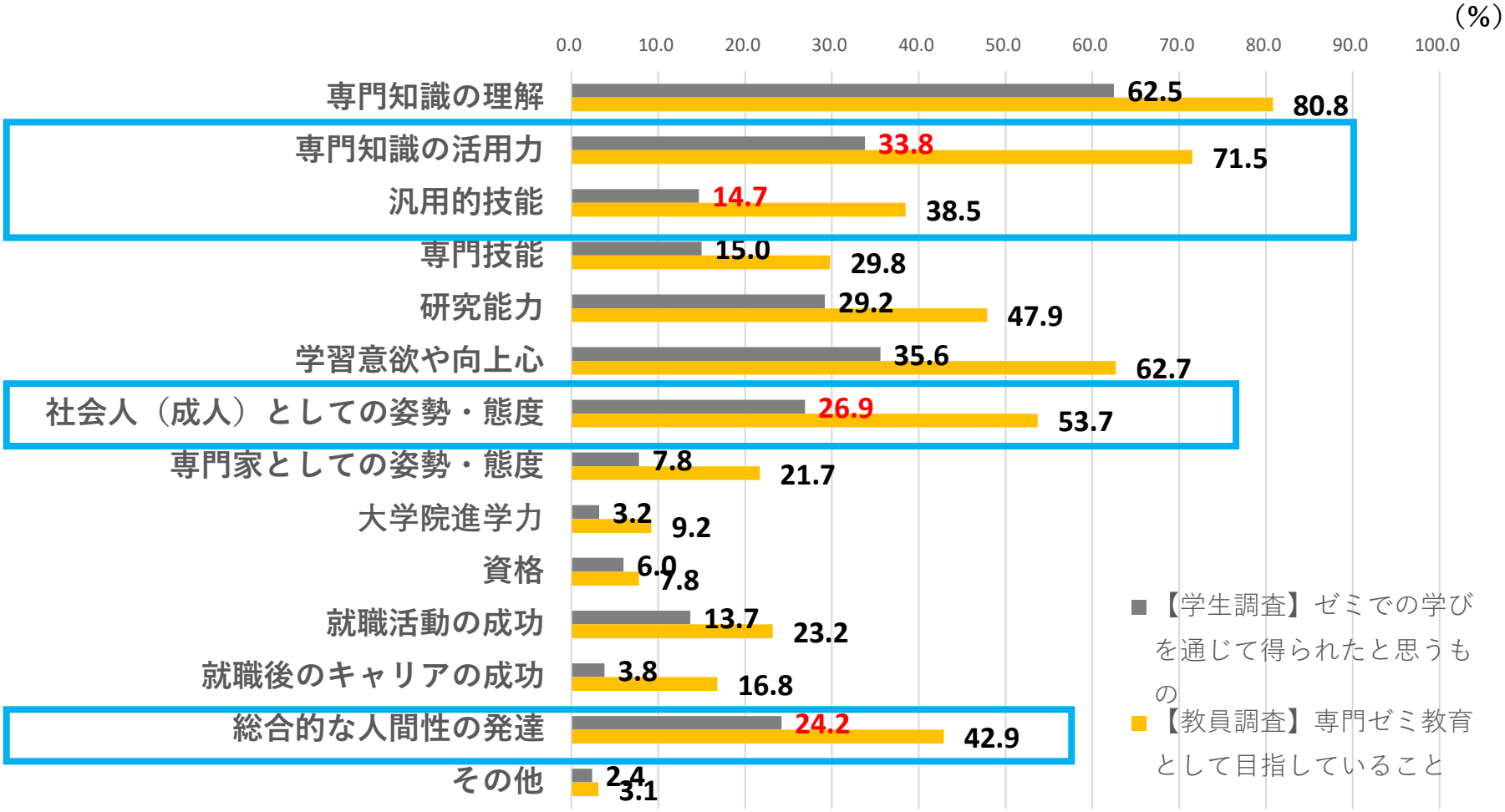


図　学士力の修得と授業・指導形態の有効性の関係　（n= 2205)

【出典】東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター（2012）「大学教員の授業観と教育行動」http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kyoin_chosa.pdf（最終閲覧日：2016年3月3日）.

ゼミは、汎用的能力／態度・志向性の修得に有効と考えられている。

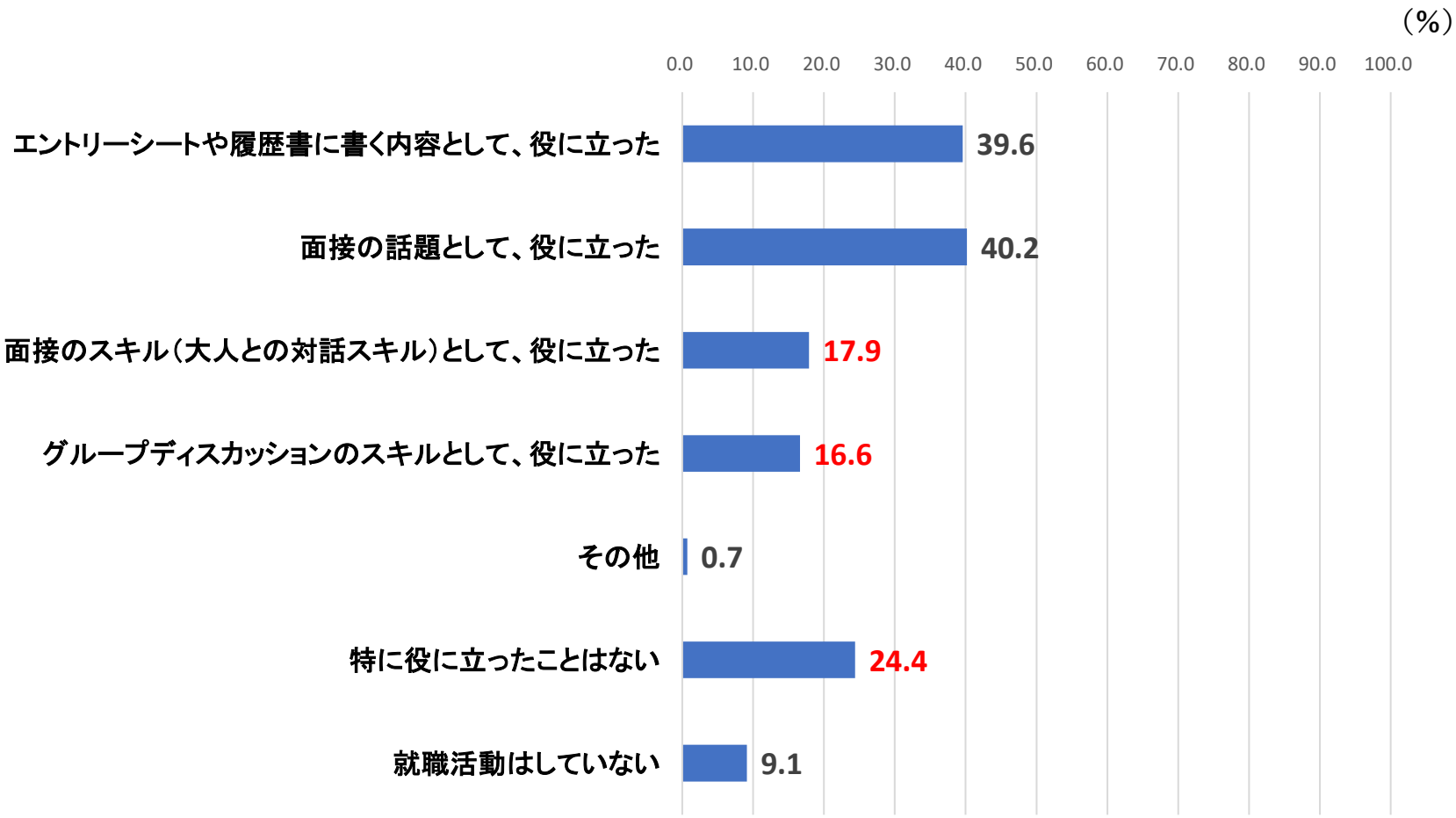
2-(2) 専門ゼミの目標と成長実感の関係



※あてまる選択肢を全て選んでもらうチェックリスト方式の設問

専門ゼミの目標は、必ずしも期待通りではなく、成長実感はさらに低い。

【参考】就職活動にゼミでの学びは役に立ったか



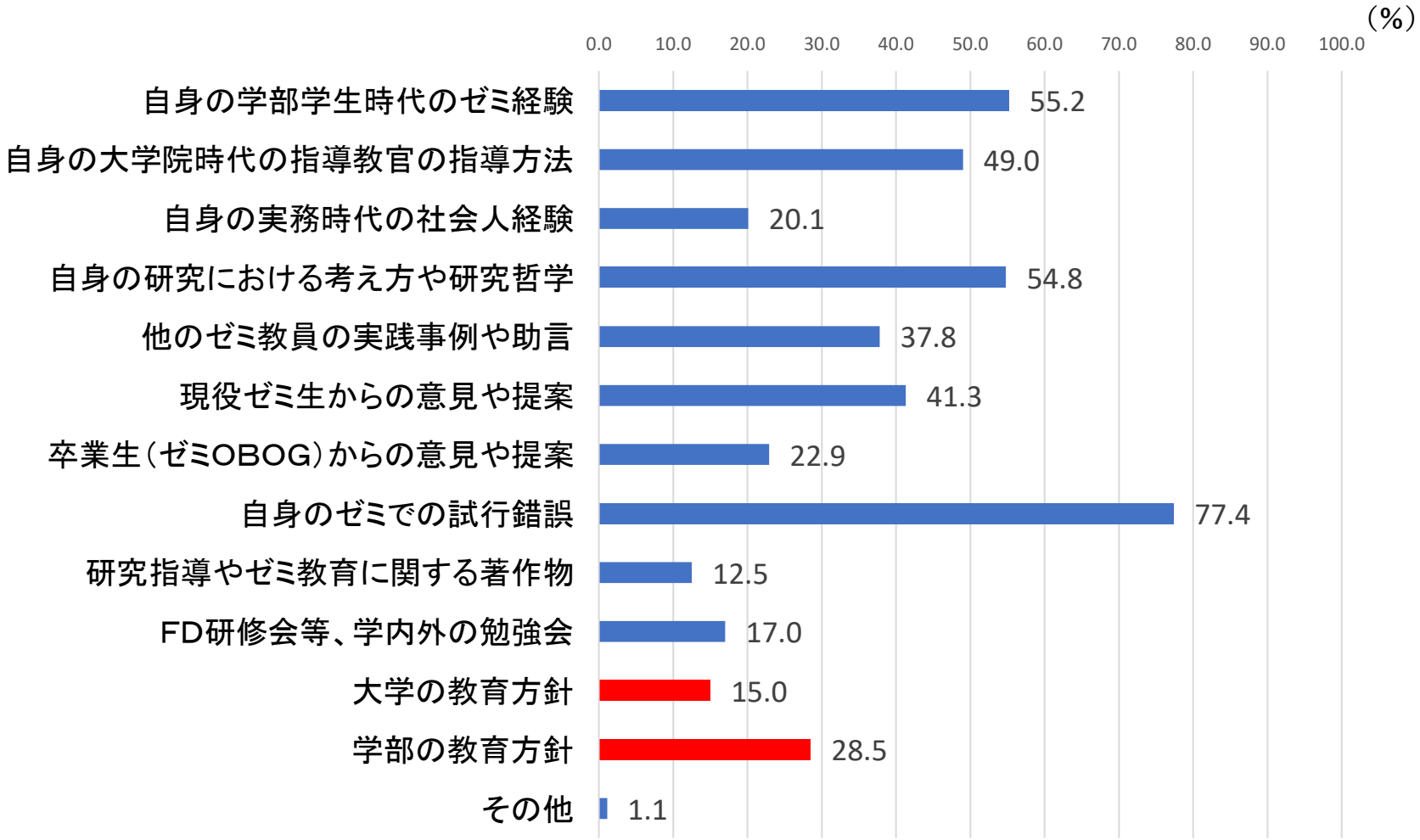
ゼミでの学びは就職活動に何らかの役立ちがあるが
スキルとしての役立ちの実感は低い。

【参考】諸活動への積極性と成長実感の関係

	ゼミを通じて成長したと思うか					
	大変そう思う (26.2%)	そう思う (36.7%)	どちらかといえばそう思う (23.1%)	どちらかといえばそう思わない (8.3%)	そう思わない (3.3%)	全くそう思わない (2.4%)
学習活動面と共同体活動面の両方に積極的だった (42.8%)	**41.7%**	**43.3%**	12.9%	1.8%	0.0%	0.2%
学習活動面には積極的、共同体活動面は消極的だった (33.3%)	20.4%	37.0%	30.6%	8.2%	2.9%	0.9%
学習活動面は消極的、共同体活動面は積極的だった (6.5%)	11.9%	35.8%	32.8%	10.4%	6.0%	3.0%
学習活動面と共同体活動面の両方に消極的だった (17.4%)	4.5%	20.1%	30.2%	23.5%	11.2%	10.6%

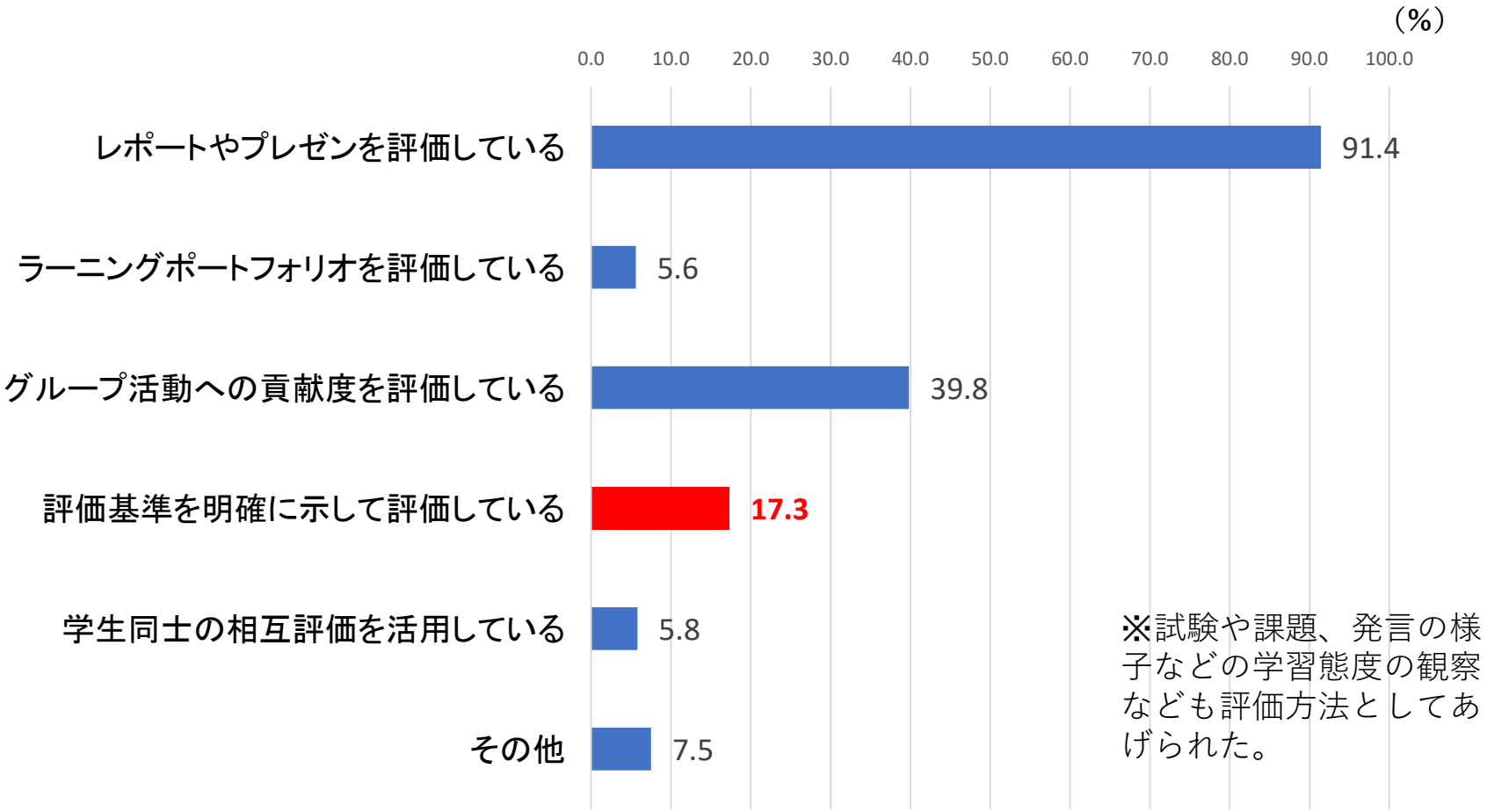
学習活動と共同体活動の両方に積極的な学生が、大きな成長実感を得る。

【参考】専門ゼミのあり方に影響を与えているもの



専門ゼミは教員自身の経験に依るものが大きく、
組織的な方針の影響力は小さい。

2-(3) 専門ゼミにおける評価方法



※試験や課題、発言の様子などの学習態度の観察なども評価方法としてあげられた。

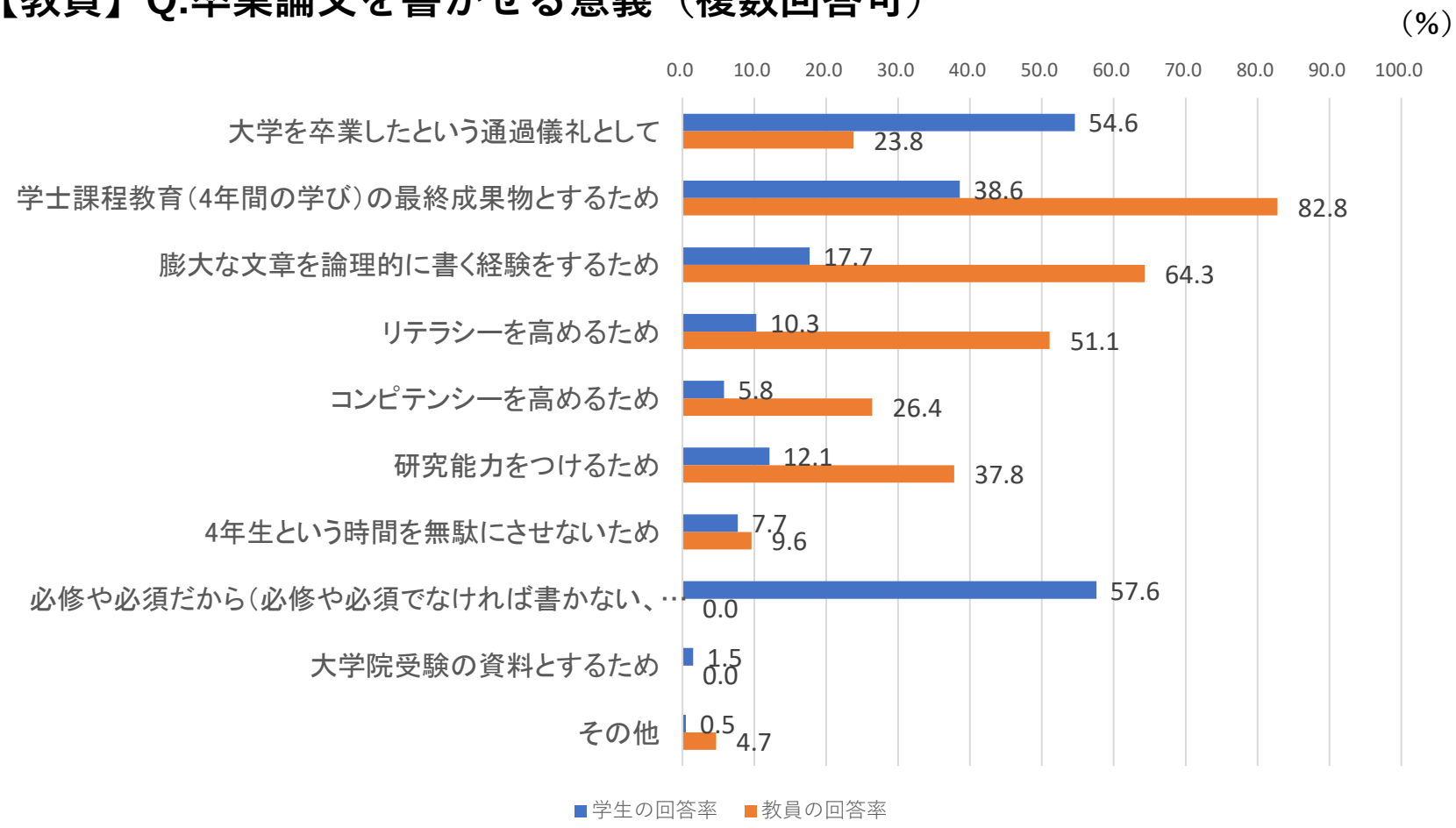
パフォーマンス評価を導入しているが、評価基準は不明瞭である。

※パフォーマンス評価＝知識や技能を実際に用いる活動やその成果について，直接的で組織的な観察を通して解釈する評価方法の総称。実技、発表、レポート等による評価はこれにあたる。

３．卒業研究・論文の観点から

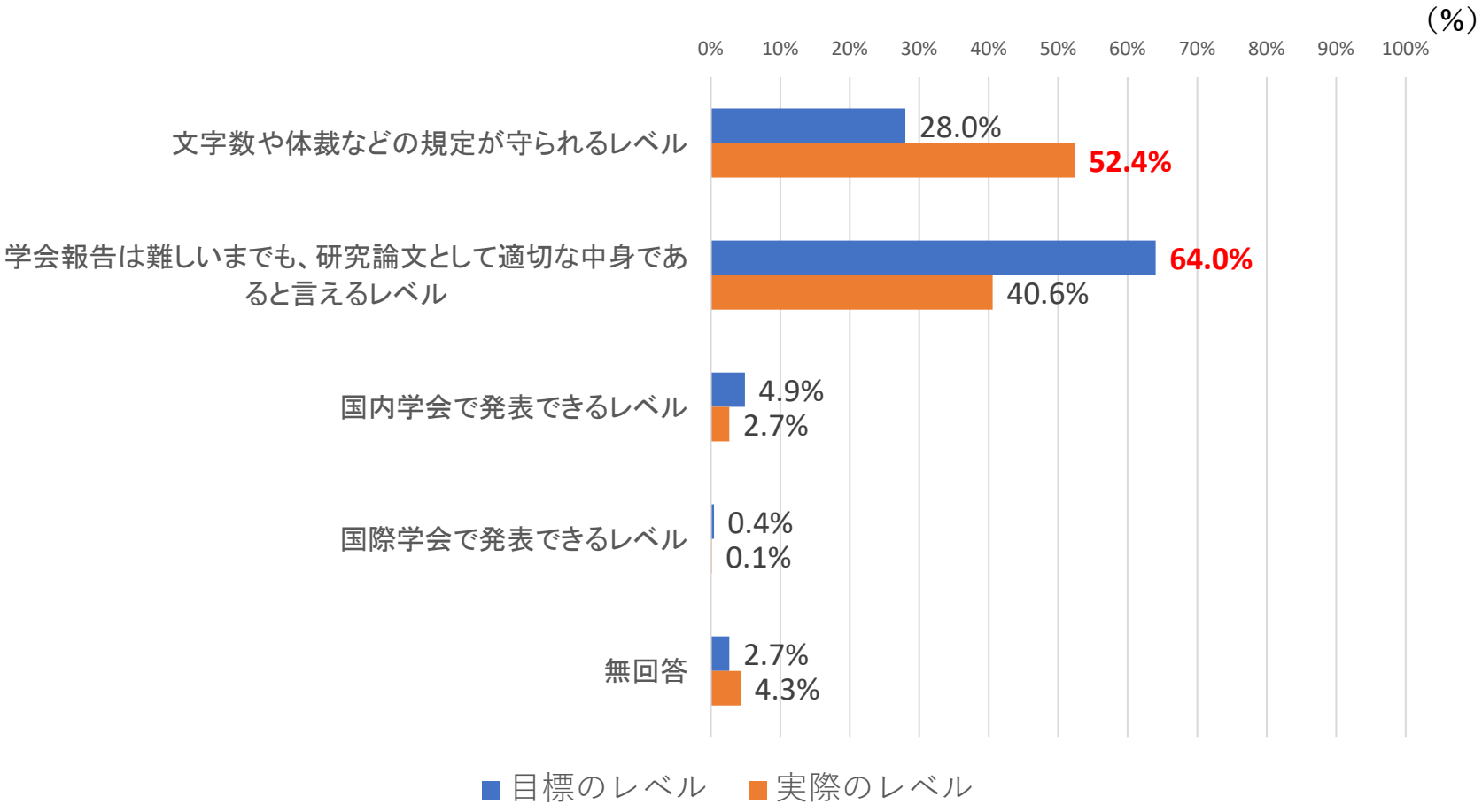
3-(1) 卒業研究・論文の目的意識に関する問題

【学生】Q.卒業研究（論文）に取り組む理由（複数選択可）
【教員】Q.卒業論文を書かせる意義（複数回答可）



「学士課程教育の最終成果物」という認識は、学生側にはあまりない。

3-(2) 卒業研究・論文の質に関する問題



過半数の論文は、研究論文として適切な中身とは言えないレベル。

【参考】歴史に見る卒業論文廃止事例

●京都帝国大学法科の卒業論文廃止事例（明治期）

理由①：論文制度は大学院学生に応用すべきであり、大学生には不適当。
理由②：**多大な労力**を払っているが、**不完全な作品**が多い。
理由③：読書力の向上、特別な知識習得には有益でも、法律・政治**全般の知識習得という点では欠落がある**こと。
※文官試験の結果が悪かったことも一因とされる。
※廃止の結果、文官試験の結果は改善されたが、図書館の利用率は下がったという報告あり。

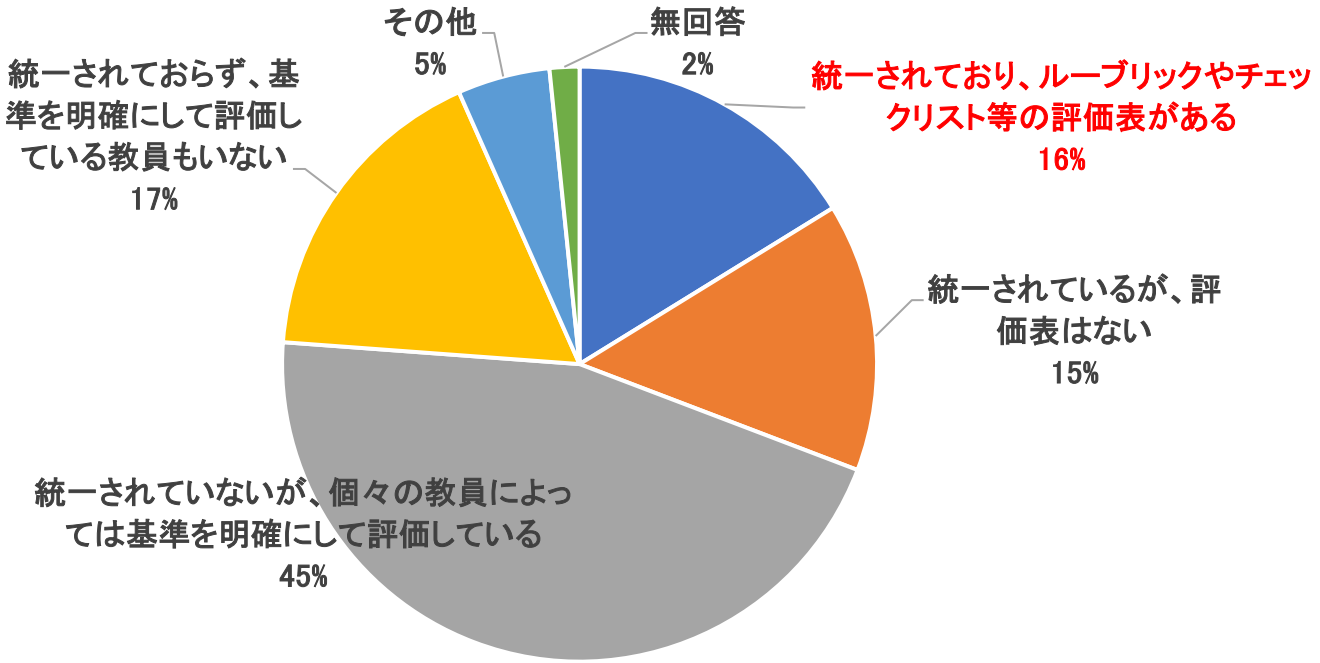
●関西学院高等学部の卒業論文廃止事例（大正期）

理由：論文を書くために**授業を休む学生が増加**し、にもかかわらず論文として優れたものが少なかった。
※卒業論文に代わって、指導教授に研究報告を提出する形式になった。

エリート段階の高等教育でも、卒業論文の質は問題視されていた。
⇒ユニバーサル段階の現高等教育において求められる卒業論文の質とは？

3-(3) 卒業研究・論文の評価規準に関する問題

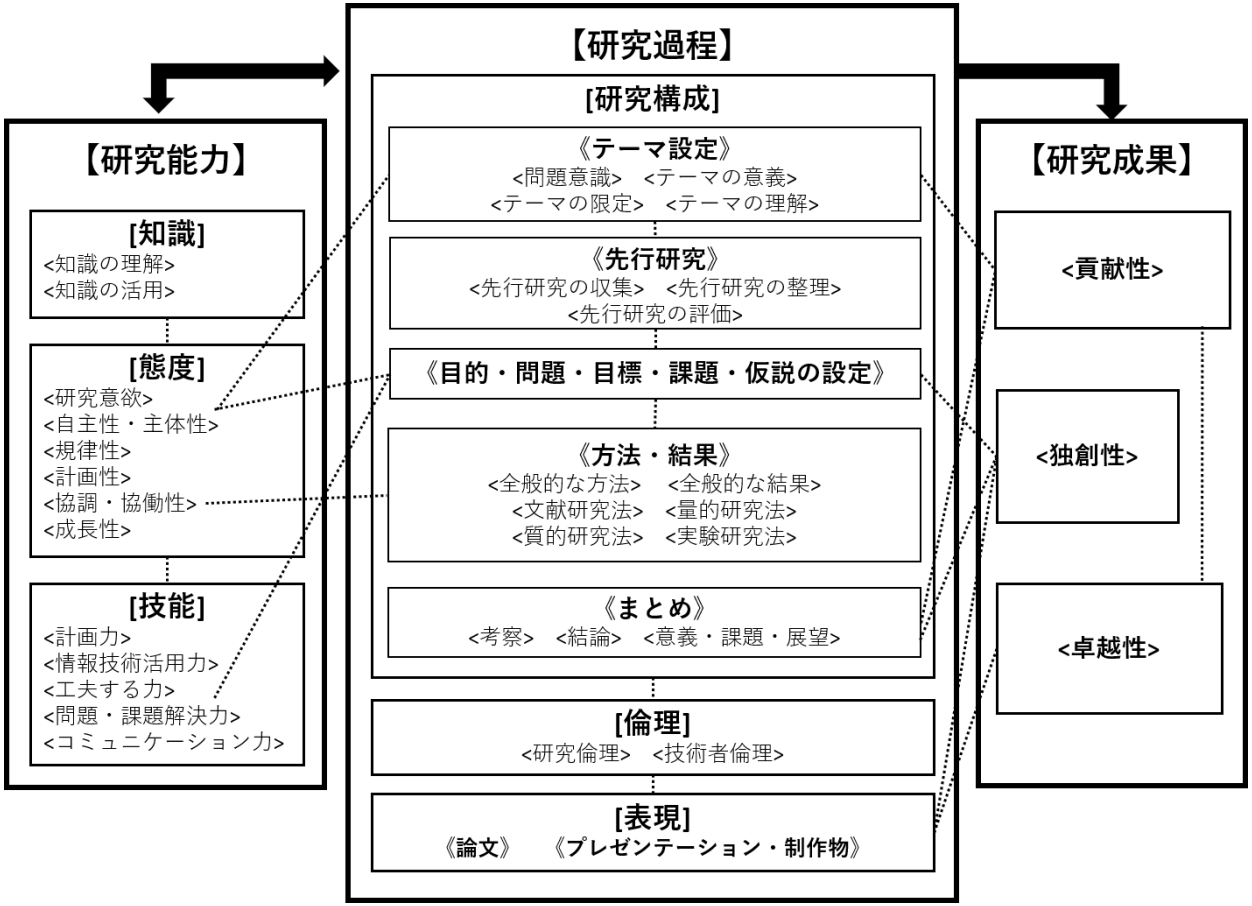
Q.卒業論文に対する評価基準は学科として統一されているか



●組織的に統一された評価規準が定められている学科は2割に満たない。
●約7割の学科では、評価基準が組織的に統一されていない。

【参考】卒業研究・論文の評価規準の整理

●公表されている24件の卒業研究・論文の評価規準を分析し、体系化したもの
（内訳：人文科学3件、社会科学5件、工学8件、農学1件、保健4件、教育1件、その他2件



卒業研究の評価規準の体系（西野，2023，印刷中）

※西野毅朗（2023）「大学教育における卒業研究の評価規準体系化の試み」京都橘大学研究紀要第49号、印刷中

【参考】DPから卒業研究の評価基準を策定した事例

（広島修道大学人文学部人間関係学科教育学専攻の卒業研究の評価基準事例）

ディプロマポリシー	評価観点と方法	評価基準
1．確かな思考 「人間の発達と形成」について深さと広がりのある知識と教養を獲得するとともに，それらを再構成し発信するための教育学的リテラシーを修得し，自ら主体的に学びを創り出すことができるようになること。	①理解（a）	卒業論文のテーマについて的確に理解して考察できている。
	②分析（a）	学問的な方法論の基礎にたって分析できている。
	③表現（a）	論理的・実証的で分かりやすい表現ができている。
	④自律性（a）	計画的にとりくむことができている。
2．広がる経験 多様な教育実践の機会に積極的に参画し，「人間の発達と形成」について得た考え方や知識・技能を他者との協働のもとで活用していくことができるようになること。	⑤演習における取り組み（b）	演習において，自己の役割を果たすとともに，他者に積極的にかかわることができた。
	⑥卒業研究発表会における取り組み（b）	傾聴の姿勢を持ち，主張を展開できた。
	⑦さまざまな経験の総合（a）	学生時代のさまざまな経験が何らかのかたちで反映されている。
3．開かれた心 「人間の発達と形成」をめぐる諸問題に対して，他者への敬意を払いつつ，幅広い教育学的教養と教育実践力をもって当事者として向き合っていく態度を涵養できるようになること。	⑧当事者性（a）	課題意識が明確で，テーマを自身の問題としてとらえることができている。
	⑨形式性（a）	分量・形式・引用など，広く受け入れられる一般性を満たしている。
	⑩成長性（c）	取り組みを通して，興味・関心の拡大等の成長の実感が得られた。

※(a)教員評価　(b)ピア評価　(c)自己評価
※相馬伸一（2014）「卒業研究評価ルーブリックの開発－学士課程における教育成果の可視化のために－」広島修大論集第55巻第1号，15-31.を参考に筆者作成。

４．まとめ

（１）現状の問題点の整理

①汎用的技能や態度の育成に効果的と期待されている専門ゼミが、必ずしも**同目標を掲げておらず、かつ学生の成長実感も低い**。

②卒業研究・論文について教員側は学士課程教育の最終成果物にするという意義を認識しているが、**学生はそうは考えていない**。（義務あるいは通過儀礼という認識）

③卒業研究・論文の質は、研究論文として**適切な中身に達していない**ものが過半数という状況である。

④専門ゼミも卒業研究・論文も**評価基準は曖昧**である。

⑤専門ゼミの在り方に大学や学部の**教育方針が影響を与えることは少ない**。

（２）専門ゼミや卒業論文等を『出口の質保証』に活用する上での課題

①**【目的・目標の再確認】**専門ゼミや卒業論文等の高学年次の必修科目の学修目標を、DPと結び付けて組織的に規定し、学生に周知していくこと。

※ PEPA（Pivotal Embedded Performance Assessment＝プログラムの教育目標に直結するような重要科目で、科目の評価とプログラムの評価を結び付けて行うパフォーマンス評価）の実施⇒縦断的にPEPAを実施できれば、入り口から出口までの過程の質保証も可能。

②**【評価方法の見直し／評価基準の策定と活用】**最終学年におけるDPの到達度を総合的・客観的に測定する方法を見直すこと。論文、レポート、プレゼンテーション、制作、製図、上演、ポートフォリオ等、多様な評価課題の中から、設定した学習目標の評価に適したものを選択する。また、合わせて評価基準も明確にし、総括的評価だけでなく形成的評価にも活用すること。

③**【カリキュラムの見直し】**ゼミ教員の負担を減らしつつ、最終学年で質の高い成果を学生が生み出せるようカリキュラムに工夫を加えること。例えば、2, 3年次におけるライティング教育や研究教育の充実、PBLやインターンシップとの連携等。

④**【公開性の向上】**卒業論文等の最終的な成果の公開性（指導教官以外に見てもらうこと）を高め、質の高い教育や学習を促す緊張感を生み出すとともに、社会からの理解を得ていくこと。

※ただし、倫理的問題を含むこともあり、何をどこまで公開するかについては調整が必要

※また、卒業論文等の作成のための過程においても可能な範囲で社会連携を模索すること。

⑤**【統一性と多様性の両立】**以上の課題について、教員間で議論し組織的な統一を図りつつ、教育や学習の多様性にも配慮し、豊かな学びの環境づくりを実現すること。

【参考】京都橘大学看護学部卒業論文発表会の様子

【看護研究演習Ⅱ　卒業論文発表会】（2019年）

- 11月9日土曜日に卒業論文発表会を実施しました！
- この発表会では、4回生が10月に提出した卒業論文を１名あたり５分の持ち時間で発表します。本番に向けて、４回生は資料を作り、５分以内で発表できるように話す練習を行っていました。
- 発表会当日は、**低回生**や**実習先の指導者**の方など多くの方々が見学に来てくださいました。たくさんの人たちを前に緊張している4回生もいましたが、みんな精一杯、練習の成果を発揮して発表していました。４回生のみなさん、お疲れ様でした！
- 低回生のみなさんは、４回生になった時に発表できるように日々の授業を頑張りましょう！！

【出典】京都橘大学看護学部看護学科フェイスブックページ
https://www.facebook.com/profile.php?id=100057555006690

ご傾聴いただき
ありがとうございました。